

第28回 全国学生青年合宿教室

昭和58年 8月6日(土)～8月10日(水)

可歌 和稿

第1回 和歌創作

雲仙国立公園 有明ホテル

国際政治評論家
三十八年四月論議顧問

斎藤 忠

命ありてまた訪ね得し空仙の空かくも暗れ日影やさしき
なつかしき思ひ出を胸に歩み入る湯けむりの町よ風さわく木林よ
風吹き通る町を行きつつふと思ふわが若き日はすまに帰らざり

昭和十四年に当地にまゝれて以来四十四年目のこと

(小田村記)

第一班

いかばかり曲がれば着くのか頂上に昔の旅人の苦勞しのぼる
神奈川大・経三 平野耕治

福教大・教四 森田重隆

舌底の手術受けけれ広瀬兄と小人のことお聞きするなり
かの妻の火にも水にも入りなれと給ふこと聞けば涙流るる
十とせ余リ二つの歳より覚えられし万葉の御歌の美しきかな
その御歌五十年経だてて今もなほその人の生を支へられしか

神戸市外大・外二 有森信幸

吾々と同じ岳登り采し外人によくこここまでと嬉しさおぼゆ

九大・経二 金子隆義

銀の橘湾に点々とほのかに見ゆる十三の船

早大・社会科学一 吉中誠人

島原にたなびく雲の乳色にのそける碧は淡く溶け込む

亜大・法一 木村俊一郎

峠より雄々しき眺め見下ろせば心は清く澄み渡りたり

徳山大・経一 濱砂弥禎 十一

島原の景色を眺めふと思ふ我が郷里の景色の様に

国文研 徳永正巳

夏草の生ひ繁りたる山路行けば木の間がくれにうぐひすの啼く
この細き山路御幸きて大御歌よまし給ひしみかど偲ばゆ
高原に群れ咲く花をめでまししみかどは未だお若くをはしき

国文研 末次祐司

老いませし身をかへりみずはこばれし師のみ姿の傘かりけり
国のためたふれし人を偲びつつ語らひ給ふみことば悲し
国憂ふ激しきしらべのみ言葉は我が胸内を貫くおぼゆ

第二班

満杯で風に吹かるるロープウェイ谷底見れば動悸早まりぬ
宮崎大農四 鹿毛義弘

登山者のにぎわう山の頂きにひっそりと咲ける美しき花
早稲田大理工一 中村幸司

窓の外の雄大なさまに今吾は飛行機の上かと思ひたくなりぬ
京都大経済二 松原弘造

西南学院大経済四 町田周二
有藤先生の御講義の折に御歌を拜聴して

しみじみと歌をあげられし師の君の高きしらべに心洗はれにけり
高千穂商大商三 小松真一

バスの中で
バスの中で唄う友等の声々は皆高らかと元氣あふるる
匝細亜大法一 国分俊喜

仁田侏すれちがうたび声かわす笑顔がたえぬ新しき友
九州大医六 安藤洋志

二つなき国の行く末思はれる大人の心の胸にせまりく
齊藤先生の御講義をお聞きして
国文研 小田村寅二郎

合宿もはや半ばとはなりにけり時経ちゆくを気づかぬままに
緊張の連続といふ日々なればかく疾く時は過ぎゆくらんか
窓の外の木々の緑は活き活きとまじにうつりて見るに漣しも

国文研 小柳陽太郎

開会式にて

合宿はいまはじまると高らかに歌ふもう水し君が代わりのうた
声のかざりうたへば胸の迫りきて七さみ友らのおもわうかびく
次々にはげますがごとうかびくるおもゆなつかしかの友達の友

国文研 名越ニ荒之助
若さらの聲にはげまさる尾根つたいのぼりてゆくかな御製碑めぐりて
大御歌はそりてたてる岩肌深くさざまる素直の書にて

国文研 岩越豊雄
つぐらおりの坂にいづれば有明の海は眼下にひろがりてみゆ

国文研 森田仁士
妙見の前見上げれば雲晴れて友ら登りし峰輝けり

妙見の前見上げれば雲晴れて友ら登りし峰輝けり

第三班

齋藤先生の御講義をお聴きして

亜細亜大 法四 最知浩一

この夏は再び皆と逢へるとは思はずりしと師ののたまへり
三年をも登壇さるゝ師の君に悲しき願いの伝はりて来し

和歌山大 経二 森山雅生

班友とせまりくる時間を気にしつせまき山道をかけのぼりゆく

中央大 商一 岩越健一

早朝にみんなで歌ふ君が代にしばらくぶりの感動おぼや

九州大 理一 広瀬 修

湯けむりのゆるりと空に溶けゆけば山里静か蝉しぐれののみ

福教大 美術一 金山波也人

万葉の恋歌を皆で詠みて

このように想ひたしとふと言わばみな思はず突ひ合へりし

一橋大 商三 内田 進

我水先と妙見岳に登るれば汗の体に吹く風涼し

明治大 政経ニ 井上 明

かけあしで友と登ぼりし仁田峠空が近くに感じたりける

日大 文理四 川合厚志

めぐりあう縁の貴さ語りし師の御言葉のよみ返りけり

国文研 定栄安治

有藤忠先生の講義を聞き

日の本にはこそさへ向けしSS20に備えなしとは憂ふべきかな
美しく愛しき日本を若者よ命のかざり守りませとふ
師の君のうたひ結へる輸送船のかなしき調へに涙やまずも

国文研 北川雅子

木下敏子さんのまあるきの道をよみて

戦いに逝かれし人をひとすじに恋はるる歌のひたにかなしも
たえがたさかなしみあれどををしきと詠はる人の心尊し

国文研 小田村 四郎

妙見岳登山

気がかひし雨もあがりて今日こそは山登りせむと若きら勇む
我もまた若きこともに山道を登りてゆきぬ足踏みしめつつ
漸くに辿りつきたる頂に汗を拭ひてしばし憩ひぬ
初秋の山風涼し西ひがしひろがる海を見はるかして

第三班

海を越へかすむすそ野を吹き上ぐる高原の風のすがすがしさよ
早稲田大社一 松浦良直

高原で友と語らふすぐそばにうぐいすの鳴く自然のよき様
亜細亜大経二 竹敷本昭裕

東大 文四 小山正篤

齊藤先生の講義を受けて

しみじみと真心こめて歌うた小師の聲聴けば涙流るる
死の際に妻子供らと手を取りて歌を歌ひし人をしのびぬ

高千穂商大商三 齊藤俊宏

雲仙の山に登りて各々が心を静めて歌をよみけり

西南学院大法一 松本忠洋

新しい友と語りあう我が心は日本じゅうに広がるようです

熊本大教一 岩瀬立宣

ゴミを前に写真とつてと頼まれし友はそのままニヤッターを押せり

九州大工三 北濱道 4

寒風に身をながかせつしもつけの小さきつばみのむらがり生えるも

関西大工三 藤居義雄

バスの中の友らがの歌声たのしきや今日の疲れ瞬時にいえる

拓殖大外四 三原義市

家の中父母の働く姿こそ我身を思ふ生命ありけり

国文研 山田輝彦

鳴きしきるかなかな聞けば国破れ山河残りしかの日思ほゆ
八月は国民こそり黙しつづき人しのぶ月にあらざるや
いたづらに反戦の声のみ高しみたまをろがむ心忘れて
一とせにたび会ひてたちまちに通ふころよ何にたとへむ
病む友はいかにいますや若き日の激しきいのちよびさませいま

国文研 北島道治

雲仙の妙見岳に今立ちて天草島を遙かにぞみる
突風に白雨となり降りつのり不立も家もしばし見えずも

第五班

仁田峠にて

熊本大医二年 山田和慶
峠よりおたやかなる海ながむれば緑おほるに故郷の島見ゆ

佐賀大理工三年 彌吉博幸
頂きに登りてはるか望みてもわが故郷はなほほるかなり

関西外大一年 平田祥二
緑わく山の間を泳ぎつつ強く響くは我らが歌声

早稲田大法四年 打越孝明

九州大法三年 石田 朗
白馬の背にもう一度乗りたしと父にせがむる女子いじらし

福岡教大四年 脇本光法
悩む我にフイトフイトのかけ声をかけてくれたる友に力づけられる

防衛大理工二年 山倉幸也
ともどもに心を開きて語り合ふ友らの顔の親はしさかも

亜細亜大経一年 松吉基光
せつせつと思ひを語る友どちの熱き胸内我は感じつつ

長崎大教三年 伊藤和久
若人に希望を托す旧き師の熱き思ひに心打たれり

師の君のまぶた閉じつつ歌はるる「船出」の歌をしらべかなしき
緑なすミヤマキリシマ鮮かに御歌記さる石碑守れり

国文研

田之上正明
妙見に登り来れば夕々に雲もかからず遠くの島見ゆ
見下せば千々石の海に点々とタンカー浮びて止まるが見ゆ

西原正博
青藤先生の御講義を聞きて
亡き人を偲ばれつゝも歌はれし悲しき調べに涙し流る

開会式の折に

小野吉宣
ぞくぞくと来りし友ら席につき今や満ちたり講義の部屋は
寂知君の静肅にの一言に部屋は静まる水打ちしごと

君が代の前奏流れ来るともに君が代歌ふ時は来たりぬ
君が代を歌ひいだせば胸内ゆ感動湧きたち全身に走る

みず知らずの学生達と今やもう心一つに歌ふがうれし
大君の萬歳念じ祈り込め力の限り君が代歌ひぬ

第6班

福岡大 経済一年 前田幸弘

仁田峠にて
今はただ三十一文字が出来ぬかと一心不乱に指折り歌詠む

雲仙の山のきれまに見える海霞も立ちて静かにゆれる
高千穂商大商二年 佐藤芳博

山奥の天然岩に印された御歌にさしこむ薄日かな
防大理工一年 高田勝敏

長内先生のお話を聞きして
熊大工 四年 堺美智雄
ひぐらしは明るくなるとなき止みて小鳥にバトン手渡すといふ

青年体験発表をきいて
早大 文二年 石田雅二
誰一人見ておらずとも返へらる陛下の姿ありがたきかな

齋藤先生の講義を聞き
長大 教 二年 宮崎正樹
たのむべくはあなたたちですよとのたまはるる言葉の重み胸に残りぬ

故郷の先輩にお会いして
鹿大 教 三年 松谷晴朗
思ひかけず故郷の先輩にお会いして道なる友を喜び交わしぬ

夏キ日に峠を歩いて眺むればはるか向うは東シナ海かな
亜大 経 三年 榎本裕之

山道をあゆみてゆけば山すそに橋湾のひろがりて見ゆ
宮大 教 四年 榑原和彦

国文研

山根清

天本先輩の発表を聴いて
ささやかな生業なれども祖国なる命に連なるとの御言葉ともしも
我もまた御祖ら慕ひ一すぢの道踏みゆきて歩きたしと思ふ

大町憲朗
御霊まつる庭に友らと祭壇作りの仕事にあたるかしこき縁よ

西山八郎

国旗掲揚の折
君が代のみうたうたひつのぼりゆくみ旗しみれば胸あつくなる

第七班

早大商三 藤新成信
台宿教室のために持病を心配されるお父様を説得して
初めて長旅に出たといふ友の言葉を聞きて

幼き日よりの病なりせば御両親は君の長旅を案じられしか
心配は尽きざりしとも君が熱意に父上様の許されしかな

長崎大ニ 山口 浩

精出して頂上目指し登る吾まだ着かぬかと幾度見上げし

広島工大一 巻 晶

登山中息をすするも苦しときロープウェイ乗る友うらやまし

園山大一 波多野 義典

大自然を山に登りて眺むれば暗き想念も吹き飛びにけり

福教大四 松尾 敏史

どんなにかうれしかったか両親に合宿に行きたい心通じて

高千穂商大商ニ 小迫 孝志

雲仙の木立ちの間から聞ゆるはさわやかなるうぐいすの声

拓大外三 中村 浩一

みんなとうたをききつつすがゆけはいつしかうたはひぐろしのうた

國学院大文三 細川 三剛

英霊の御霊に心えむ御姿にたた頭の下がる想ひなり
斎藤忠講師の話を聞きて詠める歌

回文研

石山寿彦

山かひのミヤマキリンマ群れ生ふる上をゴンドラのほりゆくなり
山祖の道つらなりて登りくる友らの姿見るとは涙も

北林幹雄

妙見の頂ぎめざし友どちと声かけ合ひて山路登りぬ
笑み浮かべ語り合ひつつ登りゆけど息は途切れて苦しくなりぬ
やつやくに登りつめたる広場にて友と語れば心おどりぬ
息切らせ友と語ればおのづから心うちけき言ひゆけり

第八卷

夏祭り笛と太鼓の音とあひて手を取りはねる故郷の夕

明星大 理工三 小山典孝

輪流の折りに

ひたすらに生きた行くと友達に我に切々語りかける

熊本商大 商一 五嶋寿記

斎藤藤忠先生の講義を聞く

国思の国を憂ふる文人の思いの語水を一言葉に胸熱きかな

九州大 文二 竹内昭彦

永野藤忠先生の御講義を聞く

み戦に命をさげしみ友等 思ひ出しつつ大人は語りぬ

ふかきふかき思ひをささしめ言葉のいふ悲しく胸迫りくる

早稲田大 第一文二 木林 孝雅

非付の先生と討論して

まよにヒナリくつこかかれる我をみる 師のやさしき目思ひかへる

宮崎大 教四 廣木伸一

声高く口の平の歌うたふればよろこびみちとおどる我が胸は

海風と山の景色に身いも生れ変わりて生きたゆくへし

防衛大 理工一 神道 佳久

夢に見しもしも我が鳥よれば空を飛いたし有明のつみ

関東学院大 経一 本田 伸一

国文研

藤 寛明

天本先輩の青年研究発表を聞きて

まぐまぐに浮かび来るなり艦上にお立ちならるる陛下のお姿
夕暮れの中におひとり學手されて遙か彼方をごらんにならるる
まなかひの彼方に見ゆる一条の赤き筋は国民の列なる
ちやうちんをさびげて見送る国民にお應べになる姿うれしき

十年前初めて聞きしお話の感動再び蘇へり來ぬ

第九班

福岡教育大 教四 太田和浩

緑葉の繁れる小山見降せば背筋を伸ばし深く息する
討論をどうすべきかと思ひ悩み墨をしことと吹き飛ぶにける

早稲田大 政経一 青田史展

雲仙にて初めて会ひし人々と語をするは不安なりけり
不安をば吹き飛ばしたる師の言葉班員の言葉に心安まる

九州歯科大 歯一 矢原規考

各々の道を歩めり班友の心を知りてはつとさせらる

鹿兒島大 医四 森下剛秀

吾が胸に湧きこし思ひ伝ふればつたなかれども友は聞ききり
友どちの語る言葉は少なければこたへんとする姿うれしき

九州大 工三 魚住裕介

いかに強き思ひか国の為喜びて命投げ出さむとは
友を思ひ親を思ひて歌はるる師の御心痛むたにしのぼる

防衛大 理工二 壁村正照

合宿で初めて会った友たちとともに歩けばほととぎす鳴く

仁田峠にて

千葉工業大 工二 吉村浩之

幼児は望遠鏡に走りより両手を上げて背伸びしてみる

国文研

松吉基順

天皇のみ歌の碑^{しほみ}持さんと野岳へ向へば鶯の鳴く
大御歌のみ歌を^ま持し高原に立てば小鳥の飛びゆける見ゆ
見わたせば千々石の海は白く光り吹きくる風のいよよすずしき
眼^{まなこ}したのあしどりの池は緑濃き山肌うつつして静まりてあり
三年前白きをめでて歌詠みし仁田峠のうつぎの花はも

松本幹男

窓の外しのつく雨をものとせずわれら輪読にうちはげめり

長内兄の講義

関正臣

壇に登りやがて面をあびにける其の落ち着きよ待む我々友
美しきことばは自づと美しき心に出づと説き初めたり

第十班

官崎大教三 二階堂 彰

山峰を思ふがままに翻る燕の姿雄々しきかな

防衛大学 理工二 小川泰規

久々の雨にぬれたる草々は我と同じく新たになりけり

高千穂高大 商一 篠原康一郎

バスの中ちらりと見たる友の顔みず晴々と我も心あらはれむ

広大 医二 高木一生

夏の日の緑深まる山岳に友の声聞き心活きたり

九大 工一 下原一晃

疲れるからと往復使ったロープウェイ足のかわりに懐痛む

熊大法一 森川博

夏の日に歩きなむかな四季の時心を傾くば我感じ得るかな

早大 政経四 石黒雄一

静かなる口調のうちに如何ならん思いを込めてか師は語られき

日大 文理三 金谷美保

火をたきて陞下を送る鹿兒島の民の真心我も持たまほし

国文研 室迎矢太郎

みともらとみたまかへむと仰ぎみよはさやけき空に星のかがやく
もえあがるかがり火にはえてみともらのかがやく顔美しと見つ

第十二班

日本大 文理二年 秋元 雅光

天地の彼方 睡まじ 広がりて 何とおおしき 大和の国は

雲仙仁田峠にて

亜細亜大 経営二年 吉川 理夫

足休め一息せん^{妙見岳に上りあり}とふりむけば 眼下に見ゆる海ぞ広けり

早稲田大 法 三年 吉田 昭仁

すがすがしこころもちかな 汗かきて 雲仙の山登り後

熊本大 教育一年 吉岡 正宏

青空の海で拾ってきたものは 焼けた素肌と夏の思ひで

九州大 理 二年 森田 哲史

雲仙の頂上より見れば 半島の海を割きつゝ 伸びにけるかな

大分大 工 四年 西川 恒二

迷い持ち 感づる事を 求め来て 見知らぬ君との語り嬉しき

福岡大 商 三年 宇野 世史也

合宿に不安を覚えし我なれど 先輩のほほゑみに 励ませられたり

開会式の学生あいつの折りに

国文研

福島 敏男

思ひ出す阿蘇の合宿語るうち やつやく 友に笑みが 浮び来ぬ

野田 顕龍

汗流し妙見岳に ひとりつく 有明みれば 心すがしき

結城 誠二

高原のみやまきりしまよみ たまふ 御歌に 友らとしはし 見入りぬ

国文研

那須 三元

白浜 先輩の青年研究発表を聞きて

先輩の発表の時 近うけが 我が心の 胸の高まる

高枝にて 寫得しよりの 学ぶ人等 之給ひし 先輩たち

第十二班

九州大学 法三 有村浩明

妙見岳に登りし折

友どちと山に登れる嬉しさに歩足は早くなりけるかも
やうやくに辿り着きたる頂に微笑む友と並び立ちたり

防衛大学 理工二 鹿島真

さはやかな笑ひ声の間こゆるはぎつとあそこか山頂なるか

早稲田大 法一 岡野元慶

つらいけど70に近い先生が登るのをみてまたかんばった

宮崎大学 教育一 植村安浩

峠道登る途中でへこたれて進むはつらしもどるはくやし

北九州大 文四 島村恭輔

真剣に語る友の言葉から新たに学ぶ喜びを知る

山梨学院大 法三 梅原広次

山の上登りて景色をながむ時期待どうりに我は見るなり

長崎大学 教育一 田中康明

妙見岳を一人で徒歩で下られる小田村四郎先生を拝見して

学生に汗を小さく手をふる先生を見つけ我も手をふる

国文研

折田豊生

国を思ふ深きみおもひしのぼるる老師のみ声耳に残れり
沈痛のみ声にこもるおほいなる力に心のすべられてゆく

占部賢志

苔むして立てる巖に大御歌水茎しるく刻まれてあり
そより立つ碑かこみ群れ生ふるみやまきりしま緑なしにり

第十三班

九州産業大 商四 西村義広
有明のかすみかかれる海原に通るゆく船白く波立つ

早稲田大 政経一 遠山真太郎
妙貝の頂に立ちて有明を皆と共に見おろしけり

岡山理科大 理三 大嶋康資
仁田峠の駐車所からロープウェイ乗り場に行く時に詠む
泣き声を聞きながら後ろを振り向けば馬に乗りたる子の姿見ゆ

仁田峠登上にて
庶島修道大 人文二 堀田淳一
苦勞して登りきたとのよろこびを友に感じてうらやましくなり

熊本大 法一 増住康之
頂きの赤い鳥居を振り返る自分が最後に山を下る

西南学院大 文二 日比生哲也
妙貝山に登りて
山頂に着きて両手を広げれば天にぞ誘ふ風が吹きけり

一橋大 社会二 下村訓弘
ぞくぞくとホテルの玄関くぐられる先生方を尊くぞ見る

徳山大 経済三 中村道陽
眼を閉ぢて「出船の唄」を唄わるとる大人の姿に涙こみあぐ

国文研

宝辺正久

夫みとる妹が唱へし万葉歌友が壇上にうたへば泣かゆ
病む友もそを看る妹もいにしへの歌のいのちをいのちをつぎし
あつき病に堪へてうたひし連作のしらべ消えざりわれらの胸に
玄山の越の広野にいのちつぐ友のおきふし安けくと祈る

第十四班

息だえに登りたりなる妙見の美しき眺めにしばしなごまん

大阪外大外国語学部四年 黒田義宏
拓殖大商二 北川雄一

齊藤先生の講義をききて

国思ふ一人の青年を待ちまよむ大人の言葉に吾は応へむ

中央大法二 京田清人

美しき師の御言葉に魅せられていつか式もとの身正せり

E.E.C. 本語専門学校 佐藤貴央

山頂で汗流しつつ立つ我を山風ふきぬけいとすすしきなり

九州大工一 森川公松

息はずませる段踏みしめ登るればほてなく続く海の見ゆかな

福教大三 坂本一紀

坂道を登ればすくに息切れて汗流れ出し足は痛みぬ

早稲田大法三 八木秀次

見ためにはまぢかに見ゆる頂も登りてかれはなかなかつかす

国文研

青砥 弘一

朝永 清之兄に

年々の斎庭^{中には}作りのリリーターの君のみ姿見えがさびしも

みやまいはりかがあるらむ病院中かへりましぬときこにしものを

みからだのすこやかになりこむ夏はともにつとめむ斎庭つくりを

今年にも夜空の暗水たままつりふじにをへしをつけまつらむとす

第15班

次々と汗流しつゝ登りくる友等の姿―たはしきかも
九大 大学院工修士二 松井哲也

目を閉じて一人の世界に入りし時まぶたに映るは君が姿のみ
日大 国際関係二 山本 衛

語り合う友の眼と笑顔こそこれ最高の贈り物かな
亜細亜大 経営一 菊池 宣孝

ぽそくと言の葉つなげ語らむとする友の姿を嬉しと思ふ
東北大 経済四 稲田 雅彦

滅亡の危機に頻する我が祖国心合はせて皆で守らうん
尾道北高卒 横山 博夫

我声を大に張りあげ永遠の理想心説きたる好漢忘れじ
早稲田大 法二 渡邊 人支

妙見へ続く山道登りつゝ下の友見て声かけにけり
徳山大 経済一 竹本 功

赤色にうつすくせ黄色のにじんてぬしずみかけたる夕日に見とれる
九産大 芸術四 徳内 文幸

蟬のなく深緑中で息すれば季節のかほり心にしみる
拓殖大外国語学部三 沢地弘行

雲のおおる
ヘレクリエーションを前にして
早稲田大教養三 西田厚司

暗雲のおおえる空を見上げつつ雨よ降るなと祈りけるかな

秋風が吹きぬけてゆく頂で有明の海は白く輝く
九州大教育三 藤 勝宣

日本大法三 入江一昌

すずかさに心まかせて見上げれば天空ひろく我をいだかん
八頂に立ちて

熊本大教育三 中嶋康憲

はじめの班別討論もじもじと言ひたさ事の表し難し

愛知学院大 商学四 竹島順一

憂國の至情あふるる御言葉に吾が胸ふるはせ熱くなりける
八奇藤忠先生の講義を拜聴して

長崎大経済一 杉本幸治

ひっそりと静まりかへつた山々でふと耳にぐるむらしの声

国文研

安部博之

広びゆる千々石の湾にタンカーのあまた浮びて羨しきかな

南田武法

友どちと連なりて行く木の間より涼風吹きてうぐいすの鳴く
すずか

一時の散策楽しきも思はざる同郷の後輩と逢ひて語るふ
とも

つつじさく季節に又来て天皇の見せなはされし山を見たきも

山田正三

出発に母の伝へし言の葉をおもひかへしつ雲仙へ向ふ

みどりなす諫早平野の向ふには若き日登るれ多良岳も見ゆ

内田英賢

せみしぐれふりしく道を仁田峠友るといけば樂しかりけり

待ちをぬど友は来らず友はいま道にたたかみ歌をよむらむ

太田文雄

横須賀に残しおきたる妻と子に見せこやりたし有明の海を

第17班

合宿の前に抱きし心配も今は総てなくなりぬ

九大 工一 徳田恒徳

レクレーション 楽しいかなと思いきや和歌をつくろとあせるのみどり

中村学園大 家政一 井上茂彦

はるはると汽車バス乗り継ぎたどり着きホテルのコヒーに待つかき友

防大 理工二 宅間秀記

雄大な妙見岳に登りきて有明海をみはるがすなり

徳山大 経済四 橋国浩司

わがとひとともに楽しく歌うに語り合ひつつ山に登りぬ

福岡大 人文四 長山博文

有明の海の彼方に思いゆる赤き大陸近きに在りと

日本大 文理三 岡田信一

美しきこの日の本を守らんとただひとすじに生きたまふかも

熊大 医六 古井博明

ながめたるかの湖の光りたる鏡の如く山を映して

鹿大 水産一 道家克己

雲仙の神とわれら迎へるかいつちたけて自己紹介す

国文研

早稲田大 文四 増島真弓

家なる妻へ

最老に妻に告げやらむ聖王の御本の講義今終れりと

いたろざる身をほげまゝ友とらにこころをこめて語りかけたり

この朝けあさみどり登けわたしたるの大み歌かかげありけり集いの庭に

語るべよことともむねにうつまきてよへの一夜はねづてあけけり

語り終へし銭に寄りてねがひのことは友はかけこねたり

都より大空近きこころする空のさまなどまた便りせむ

第十八班

朝のラジオ体操の折りに
朝露でぬれたる松に囲まれて胸いっぱい深呼吸する

九州大学 農 二年 森 亮介

一橋大 商 三年 西垣 功朗

ともすればわれ沈黙す迫りくる思ひを言の葉にのせ難く
佐賀大 教育三年 長谷川晃三郎

高台に登りて下を見おろせば人の小々き姿映れり
早稲田大 教育一年 小針 一真

有明に動かぬ島々見て決す我も流れし時の流れに
大東文化大 経済四年 出島 正人

亡き人を偲びて歌う師の詩の振るえる声に胸は詰りぬ
防衛大 理工二年 井上 一

妙見の頂に立つ我が心目下の景色におどろかれなり
亜細亜大 法二年 林 一玄樹

国文研

奇藤先生の講話を聞いて
先生の切なる思いの伝はるをつむりて聴けば涙のいづる
高千穂商科大学 講師 高木 尚一

木花咲やひめのみ名のみやう宿に近く細き糸多道木かげに見ゆる
一目前社用にせはしき我友がふと問ひかきし神のみ名を
はしなくも昔事記のことを会社に語り合ひつたのりかりけり
なりはひはよー異なれど日の本の民と一生きるよろこびはてな

印刷室にて作業を終らるる先輩を見し所
誤字脱字一つだに無きやう幾度も心配りて直しゆきけり
講義聞くとま無きが印刷の勞つとむる先輩を尊し
筑前高校 西村 聰一郎

西南大、文四年 重 博己

バス着けば頂上も海も霧なくて見ゆる事のありがたきかな

ロープウェイゆましたの谷を見おろせば木々の緑の重なる如く見ゆ

福教大、聳課程二年 佐藤亮司

和歌などときどきとってみてもはじまらぬ友をに見ればにかき顔なり

愛知学院大、文一年 満仲修

有明の海をのぞみてしのはるるかすかにみゆる天草の島

中央大、経二年 柴原佳史

登りたる妙見岳の山頂夏といへどもなんと涼しや

拓殖大、外語三年 関 桂 三

黄昏に涼を求めて出でゆかばすすしそそえるひぐらしの声

熊大理一年 犬丸 浩

たんだんと慣れ親しんだ友たちと顔合すれば笑みのこぼるる

東北電子計算機 上級情報士 一年 関根雅秋

齋藤忠元王の講話を聞きて

とつとつと祖国の明日を憂えては講師の思ひ高まり伝わる

立命館大、文四年 浜田清人

齋藤先生の御講義を聞きて

この年も大人の御姿に慰えたりたあたりかたく胸の躍るも

八十^{バウ}年^をまり母負きて、こられし師の君の気迫の我に迫り来る思ひす

第二十班

山口大医三 山田朗

青藤先生の御講義をお聞きして
祖国への熱い思ひをこめながら師はせつせつと語り給ひき

亜細亜大経営二 濱田実

仁田峠友と登りて汗流し山頂で吹く風の涼しさ

國學院大文一 入川智紀

齋藤先生の御講義を聞き
戦友をひたすらおもひ歌ふ師のその悲しみを深く偲ばる

早稲田大社会科学三 野口孝造

はるばると遠くより来られし先生にすまなく思ふもついうとうとす

高千穂商大商一 本間勉

仁田の山友と語りひ登らへば頂の風快きかな

福岡工業大工四 成松誠

仁田峠山を登りしむとやすみ景色眺めばお絶景かな

九州大工二 菊池正浩

仁田峠にて詠みける
友どちらと一歩一歩踏みしめて急な坂道やつと登るも

国文研

前之園登美子

散策の折
ふり向きで気づかひくれし友どちらと草道わけて進むは嬉し
天皇も歩まれしかと語りかく友のうしろにつきて歩みし

小原芳久

中学生の頃教へし子の参加くれしを
八年のつなかりを経てやうやうに共に集めて学ぶけふかな
年こそはあまたちがへどもろともに学べる縁ただにうれしき

白沢裕

小堀先生の御話を聞き
東西の書をひもとき師の君は古典読む喜び語りたまへり

竹世部益弘

雲仙に神代の話初に聞きおのづと涙こぼるゝわれは

岡村義一

仁田峠へのバスの中で
談合を重ねしと聞く湯島見ゆ七曲りするバスの窓より
そのかみの悲しきいくさ偲びつゝバス登りゆく妙見岳へ

第21班

九大工一年 中村芳郎

友どちと頂に立ち海山を見降ろしし時のすがすがしさよ

先生の心を開いた御信算に己のふがいなさに胸痛みけり

福大法一年 福田季之

皆とともに詩を詠まんとして登りけれと行きて歸りて何ぞ詠むらん

福教大教四年 是松秀文

福澤先生の御説を御聞きして

万葉の歌を唱へて祈らるる妻君の思ひいかばかりかも

一心に大人の御身を案じらる妻君の姿胸にせまりく

早大教二年 熊谷修二

天仰ぎわが行く末を思ふがな妙見丘の頂に立ち

重大経四年 今出智之

討論をいざかわすぞと意気込むも自信の無さに声なきにけり

日大文理二年 吉田克也

友どちと頂めがしゆきければ足どり軽く息もはずみぬ

国文講

小林国男

壇上に再び仰ぐ師の君のみ姿なつかし一年をへて

青年にひとへに祖国の運命を託さるる思ひのかなしかりけり

長澤一成

八十路すぎなほ切々と若きうらに祖国を頼むと語りし師はも
た、がみに教へ子さほに出でた、せ船出を送らるる御心如何に
そのかみを徳ひ給ひつししみみと「曉に祈る」を歌ひ給ひぬ

第二十二班

九川大 法三 與島誠央

山田先生の御話を頼先生の御歌を聞いて
み歌唱へひたに祈ります奥様の御気持ちのほれ胸熱くなる

五十年も奥様のみ胸にあだためわいし、赤坂み歌のくしくあるかも

丑細丑大 法三 渡辺誠司

友々の口より出づる言の葉はとつとつとあたたかきかな

久留米大 医一 青山浩一

雲仙の霧にも似たる潭沲が友の言葉に定まりにけり

拓殖大 外三 澤田幸一

涼風に講義の疲れ忘れつつ眼下にみゆる有明の海

岐阜医大 放射線一 森田浩正

頂をめぐりて進む山道を若き力で登りつめらや

愛知学院大 商四 村上明隆

いにしへの言葉にふれてものおもひ祖先かたの心あたたかき

熊本大 医二 藤川恭浩

父君のこゝと話さるる先生の気持ちに親しく思はる

早稲田大 社会科学三 浅野正彦

友どちの九州弁を耳にせばはるはる来たる遠路をぞ思ふ

国文研

加納祐五

雲仙合宿にけいめつ朝を迎へて

寝覚めして窓をひらけばやうやうに夜は明くるらゝ茜さしつ

新月の淡くかかりてひとひらの雲さへ見えぬあかつきの空

空かざる山の嶺はなほ暗くして地はひたすらにしすみりてあり

雨霧のおほき山ぞと聞きかどよき日ならむけふのひと日は

三百の友らこもりてあるからに天も恵みをたれたまひるか

空のいろはまなくうつりて新しき月の光の消えなむとせり

京産大 経三 小津 博英

ひたすらに頂上目指して踏みしめる一歩一歩の如何に重きか

一橋大 商四 坂本 慎

言の葉につまりて友はひたすらに拳をにぎりてうつむきをりぬ

言の葉に己が思ひをのせられぬ友の苦しきの伝はりてくる

西南大 経二 松永 克実

云仙の四方の風景見渡せば絵を描きたる思いをす

東大 理工一 吉田 純也

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を輪読して

先生の書き遣したる言の葉の心とつむとつを噛み締めてゆく
読むごとに太子のおもひ惚はれて胸熱くなるおもひをすなる

曰大 文理四 伊藤 宏治

頂上につきて体を休めれば山吹く風のこころよきかな

帰り来て友と語り湯浴ませば昼のつかれもいやさ水にけり

拓大 外三 真島 友一

有明の海に浮ぶ島々も遠くに見ゆる妙見の頂

高千穂商大 商二 岩佐 憲良

汗をかき一生懸命登りたる山の頂さみやかに感ず

九大 工一 石本 健夫

雲仙の山に登りて振りむけばかすみで見ゆる天草の島

国文研

「古典講義」をし給ふ東中野君を思ひて（小柳左門 左門）
（輪中 雲仙へ向ふ）

りニやかに体もいえて壇上に勉め語る君を思ふ

長さ年わづらひし身をいつくしみもとの元気をとり戻したまふ

有藤忠先生の仰詠を聴きて

中島 繁樹

国守る道心とすじに師の君は八十二年を好められたり

切々と語り中かれる御言葉に国を守らむ願ひ満ちてをり

名 和 長泰

求めつつ集ひ来し友語る毎に心開かれ思ひ交ひぬ

第31班

拓殖大 外国語三 原理

雲仙に登りて大地見渡せばあふれる緑に心静まる

尚綱大 文一 山方 富美子

遙かなる有明海を友たちと眺むる心地すばらしいかな

拓殖大 外国語三 上野 典子

仁田峠一人たたずみ聞こえしは静か鳴くなり秋の虫声

日本大 文理三 佐藤 加織

ふかみどりなす山々を見わたせば心ひろがるこころこそすれ

早稲田大 文三 板羽 明美

拙なかる言の葉なれどうなづきて師はあたたかく受けとめられたり
そのままのこころ語れと仰せらるる師の御姿の輝きであり

鹿児島大 水産三 鈴木 麻理

斎藤忠先生の御講義をうけて

先生の後ろ姿にこのうれし悲しみに触れただに悲しき
偲びてもなほ遠くある先生の心偲びつ学びゆかなむ

京都女子短大 二 藤 敦 佳世子

うみやまを一度に見ればかぎりなき美しさに信じかたきこころす

東京女子大 文理一 中澤 裕子

ひらけゆく海ながめればたえることなくわが心ひらけゆくかな

佐賀女短 家政一 田中 ひろみ

ひらけゆく広がる海の大ききやわが心にも通じることあり

第三十三班

寝台に揺られて着きし雲仙のつんと鼻つく硫黄のほら
拓殖大 外国語三 石浜聖子

新しき友の言葉の端々に一年前の我を見るなり
武庫川女子大 文三 根来佳世

敏子さんの歌を詠んで
今ほ七き愛し彼思ふたおやめにただ胸つまる思ひなりけり
土浦短期大 保育二 寂知由美

杉の木の間へ上がる湯けむりに遠きを思ふ雲仙や
拓殖大 外国語三 志和池麻理

雲間からあふるる日の光うけ千々石湾の白く輝く
広島女子大 家政一 矢谷真由美

仁田峠登山の楽しき思ひ出はいついつまでも心に残らむ
拓殖大 外国語三 奥村由美

まごころをもつて誘はる御姿に古事記のころを知らされけり
大分県立芸術大 音二 高崎栄子

有明をかなたに見疲し登りゆく反かがイドの妙見山
亜細亜大 経営一 蓬田洋子

めぐる海みどりこぎ山はるかなりああわがふるさとうれし雲仙
佐賀大 教二 津田路

国文研

国文研 夜久正雄

あももふみこころしのはれて涙ぐまれつ師のうた声に
聞くたびに涙せらるる師の君のなき人こゝろたふみこ急け

原生の沼の小草の朝霧の玉と輝く葉末葉末に
原生の沼の草原音もなく朝日さしつゝ光けぶれる
木々しげる向つ丘の上に朝雲のしろきが立ちて秋は来ぬらし

第三十三班

日本青年協議会 山岡城子

小堀先生の御講義のあとの討論にて

美しき大和言葉を班員と一つ心で語ら小うれしき

高校卒 清家久美

いかたして鳴りひびく心を一つにせんいにしえよりの大和言葉にて

九州造形短大 美術一 蒲池美恵子

高台へのぼりて空を見あぐれば雲の切れ間の清き青さよ

関西外語大 英米四 山本茂美

空に近く高みに登りて思小眼下の峰山空海よ一つにとけて荘嚴に見ゆ

梅光女学院短大 英米文二 佐藤美香

水平線丸みをおびて小くらくと包みこむなり談合島

拓殖大 外語三 三戸順子

夏盛り雲仙来れば緑燃ゆ風は吹きぬけはぎも花咲く

中村学園大 家政一 小栗美佐栄

病床の祖母の全快祈りつつ遠くに見やる昔賢岳かな

佐賀大 教育三 一ノ瀬千秋

山田先生の講義を受けて

重病に臥したる夫を見守りて詠まれし歌のしらべかなしも耐へがたき悲しき運命をそのままに見つめし歌のかくも雄々しき

大谷女大 文三 中尾純子

班別討論にて

感動を言葉つまらせ語る友の心感じて涙こみあぐ

椋山女学園短期大ニ 横地和子

雲仙の幾重の山を見わたして歌の作れる喜びよ

日本青年協議会 大島啓子

秋立つ日野岳の道を分け入れば寂おみな之しも咲き始めたり

第三十四班

遅れじとみ友のあとを間ををかず一歩一歩と歩み進みぬ

熊井 弘美

やうやくに展望台に仏りつきみ友二人のはげまゝありて

日体大 体育二年 佐々木 真澄

雲仙にのぼれば見えし湯島には悲しき歴史今ものこれり

福教大 教育一年 田中 紀美子

遠い昔に捨て去ったスポーツ根性よみがえらせ妙見岳を私は登る

佐賀大 教育三年 中野 佳織

御子息ののりこまれし艦艇をなでらる母の思ひいかにか

武庫川女子大 文四年 佐藤 浩子

合宿で何かつかみたいと思いつても居寝る我をなさけなく思う

京都女子大 文二年 矢追 正美

足とめてはるかに海のひろがりながめ居りたり峠半ばに

拓殖大 外国語三年 岩下 はるみ

目の前の山の高さがくるくると目をやれば有明の海

福山女学園大 短期大 年 田坂 睦子

目を閉じて疲れた体休めると澄んだ虫の音心に響く

日本大 文理三年 又辺 裕子

ふと立ちて登り来た道ふり返れば遠くに山のそびえ立ちたる

福岡市立城南中学校 勤務

柴田 千恵美

ふりむけば同じく息をきらーっつはげます友といただきめやす

第三十五班

西南大文ニ 宮崎文香

先輩の生命あふるる言葉にて一つ一つに正されていく思す

四天王寺国際仏教大文ニ 新宮峰子

海山の名と伝説を聞きたればな おやかしさのまきりくるかも

福教大ニ 河口敦子

野岳叢策の折に

天皇も歩まれしてふ雲仙の草深き山の辺の道

(株)宣伝会議ニライナー養成講座

市瀬 千代子

のひやかな檜のごとくひとすじに真の道を我生きめやも

福教大ニ 上谷 勝美

緑濃き山に囲まれなごやかに小き妹兵に行きたし

亜細亜大 経済四 羽毛田 万里子

思うまま言葉にできぬいらたちに自らの力なきを知るなり

佐女豆 児童教育 野村 由美

雲仙で初めて会ひし友なれど中に流るる同じ血感す

拓殖大 外国語三 神子谷 久子

我友と顔に汗し野を行けば我御前に広がりし海

関西外大ニ 井上 昌美

君により初めて知りぬ真実にかが無知なるを恥づかしく思ふ

国文研

古川 修

妙見岳に登りて

あへぎつ、登りし山の頂きより眺むる海の美しきかな

美ししと友らの歓声聞こえきて晴れたることのうれしかりけり

都留文科大 文二 水野昭美

雲仙に集ひ来たりし友どちと互ひの思ひ語るも楽し

尚綱大 文二 藤村明子

友に会ひ多く語りぬ討論会思ひあこせよ素直な心

松尾中佐を偲びて 広島女学院大文三 吉田恵津子

老ひまつる母に体をひしと寄す君の胸中は如何とぞ思ふ

大阪教育大 教二 湯川真澄

去年の夏先輩がくれたる言の葉は今もわが胸に残りたるなり
一年を経て今日先輩に会ひたれと見すべきわが身なぞを恥づべき

広瀬さんの御歌を知りて 中村学園大 家政二 小林美貴

事しあらば火にも水にも入なむと思はれし夫人の姿目に浮ぶなり

藤原先生先生の御講義を拜聴し 高枝卒 豆塚美和子

切々と語り給ひし御姿に吾身正され涙もあふる

拓殖大 外国語一 初山佳子

日にゑかる入江の海の輝きの空にとけるを古人見しかも

日枝神社 本間千江美

一年の合宿参加より一年過ぎて
一年の月日すぐしてあふ大人の姿をわれの胸熱くせり

福岡教育大 小美一 柳井文

はるか下学か水山々のやむれば涼しき風がふきぬけるかな

拓殖大 外三 野口豊子

こわごわとわが心の意かたれば師はにっこりとわれにはほほ笑む

第四十班

福岡県立三池工業高校 宮川新一
合宿で一年ぶりの再開を友と共によろこびかたらん

アムニチュリックススクール 重松憲二
有明の海に浮かびし島々にいにしへ人の心しのばる

筑前高校 本石浩義
新らしき友と競いて登りつつこの交わりがずっと続けばと

神奈川県 厚木市役所 長嶋一樹
登り来て妙見岳より眺むれば眼下に映ゆる有明の海

亜細亜大学学生部 宇田川裕
ふもとではあやしき雲がかかりたる山を登れば薄日さすかな

出光興産 澤田茂 ほか
雲仙の山頂に来て祈りけり美はしき我が祖国の栄えを

国文研

九州大農大大学院一 上村栄章

森田藤先生の御講義を聞き
師の君の国を憂ふる声聞けば我知らずして涙やまらずも
師の君のこの合宿に託されし願ひの深さみしとせまりく

東中野 修

斎藤先生の御講義
かそかなるしほりたすことき師のみ声ききいるうちに涙こみあぐ
日の本に栄あれよと歌ひ給ふそのみ調べのなんと悲しき
み戦にいのちささげし人々の思ひしのひて師の歌ききぬ

日生野 貢

妙見岳に登る
若きらにいざなはれつゝ登りゆく山路足重くつくいき苦し
汗ばみて苦しきまゝに立ち止り眺めやる身に吹く風すずし
いたゞきの妙見神社若きらと拝し奉りぬ心すかしき

第四十二班

厚木市役所 森久保寛
山の辺の道を歩き、秋覚御眼下に咲きぬるホトトギスかな

福岡県立水産高校 菅原亨二
薄白々す木々の間に仰ぎ見る岩に刻みし陛下の御製

福岡県立筑前高校 渡邊裕
天草を眼下に仰ぎて御製碑の立つ野岳の原に登り采たりぬ

福岡市立城南小学校 友納恵二
野岳采て北眺むれば思ひ出す我がふるさとの愛しき人を

津軽赤倉山神社 白瀬久聖
仁田峠木々の中からうぐいすのさえずり聞こへ心に響く

徳山大学学生部 石井義基
たのしい友の笑顔を囲みつつ語らうれいさ、今日の良き時を

第四十三班

臣細野大学学生部 平澤 孝一

雲仙で見知らぬ友と語り合ひ心かよへばうれしかりけり

筑前高機 永田 強一

語り合ふ祖国のことに血おどれど気にかかりしは妻と三月の子

中種子養護学校 宮下 春幸

いただきに登り立ちたる喜びを今伝へたや待てる妻子に

ふるさと島の見ゆるを指さして教ゆる友の面輝けり

出光興産(株) 麻生 春天

一歳ひととせの時の流れを忘れさす友の笑顔に心安まる

福岡県立水産高校 松尾 延明

白き雲わずかにかかる天草のふるさとの島なつかしきかな

松陰会事務局 河口 正人

英霊の雄叫びなるか雷の会のはじめに裂けるごとく鳴る

事務局

(記録) 西川 伍朔

二十回もの合宿を促して
小田村理事長らとの会話

何ごとも今年限りかと七十路の心許なき旅をゆく我

齋藤忠先生の御講義を聞き (写真) 加藤 幸雄

八十路には見えぬ元気なお次女をまたこの夏も拜しうれしき

函の手にマイク握りてわが国がおかれし危機を語りたまひぬ

息又国の至情あふるる先生の言の葉未聞きて身ふるいのする

黒岡 寛

久々に訪ぬ来たりて雲仙の美しき山河に心ときめく

筑前高校卒 井上 徹

来てみれば楽しぬ木とはしやぎたる友と別るる時寂しからん

八代高校三年 岩 坂 秀彦

山間にひぐらしの声すみゆたり今日もくゆゆく空の美し

筑前高校卒 杉山 淳

さそゆ来て来てはみただけど話しとは全たくちがうアルバイトかな

八代高校三年 杉田 佳寿子

ぬむたきにぬむけまたこの目をこもりつつ我が身むちうち言も働く

八代高校三年 柏田 直子

アルバイトぬむきまたこもりつつ我が母のもと女眠したし

八代高校三年 和田 江理子

いそがしいアルバイトのあいまに外に出るつかれた体に秋の風吹く

国文研

今林 賢郁

むらがりてみやまきりしま咲くといふこの高原に歌碑は立ちたり

きざまれし三十二文字をたどりつつ大御歌はも誦しまつりぬ

山内 健生

をちこちゆひぐらしの声の聞えくる定近を赤とんぼ形が

天本 和馬

斎藤先生の御講義を聴きて

壇上で祖国危きを語る師の御言葉に力こもれり

出征せし人をしたひて歌はるるあゝ堂々の輸送船を

中村 公明

山道を踏みしめながら友達と語りつゆくは心癒しき

斎藤忠先生の歌稿をこの訂正版と必ず差し替へ
て下さい。

国際政治評論家

ジャパンタイムズ論説顧問

斎藤 忠

命ありてまた訪ね得し雲仙の空かくし晴れて日影やさしき
なつかしき思ひ出を胸に歩み入る湯けむりの町よ風さわぐ森よ
殉教の碑はいづこそと路問へば花売らひとの優しかりけり
風吹き通る所を行きつつふと思ふわが若き日はすでに帰らず
思ひ出はかくも悔のみ先立ちて面伏せて行く夕風の町

（昭和十四年に当地に来られて以来）
四十四年目とのこと。小田村記

ロンドンからの電報

山口秀範君は学生時代からこの合宿に参加し、本年六月よりロンドン大学大学院に留学中です。

山口秀範

(大成建設(株)勤務
昭和四十八年早大政経卒)

ロンドンの夏を涼しめ雲仙の高原の風しのほるよかな
ますらをの力あつめて日の本のいしずえ築くつどひなせらるが
先人の苦闘の故に万国に誇れる国ぞ我らが祖国は
されど又信なき民の榮ゆるはつかの間のみと肝に銘せむ
我は今壁にいとみて西欧のあざとこころをまなびつつあり

電報はローマ字でありましたから私が右記の様に直しました。
第五首目の「壁」は、語学等の壁といふ意味ではないかと思ひます。

古川記

小田村寅二郎先生の御歌を次のやうに訂正します。

国文研 小田村寅二郎

合宿もはや半ばとはなりにけり時経ちゆくを氣づかぬままに
緊張の連続といふ日々なればかく疾く時は過ぎゆくらんか
年に一度心知り合ふ友どちの遠く寄り来て勵む集ひよ
若きらにわれらが思ひ通ふべき道ここにありと信じてやまず
窓の外の木々の緑は活き活きとまみにうつりて見るに清し